
アビスソルジャー

海路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アビスソルジャー

【Nコード】

N0226BA

【作者名】

海路

【あらすじ】

奈落との契約によって、自らの大切な物と引き換えに人間離れした強大な力を手にする事が出来るアビスソルジャー！。

少年は、自らの記憶と引き換えにアビスソルジャーとなる。

第1話 奈落の契約（前書き）

えっとファンタジー物です！苦手な分野に挑戦！

第1話 奈落の契約

「汝、奈落の淵に立ち、現世と冥界の狭間の調節を司る者とし、その役目を全うする事を誓うか？」

「我が魂に誓う。」

「汝は、奈落の力と代償に何を差し出す？」

「我が記憶を差し出す。」

暗闇の中、2人の男が契約を結ぶ。

「よかろう。汝に奈落の使者、アビスソルジャーの力を与えよう。」

そう言うと、男の手から青い光が放たれる。

暗闇の中、その光だけが彼らを照らし出す。

少年の首に首輪が掛けられる。
アビスソルジャーの証だ。

それと同時に、少年の頭から記憶が抜き取られる。

光は消え失せ、暗闇だけが彼らを包んだ。

第2話 旅の供

ここは砂漠の町、ラマール。

ここはオアシスに近いというだけあって、交易の盛んな町だ。そして、今俺はこの町のメインストリートとも言える大通りの真ん中にいる。道の両脇には商人達が店を並べ活気に満ちている。

「おい兄ちゃん、あんたアビスソルジャーだろ？」

振り向くと5人の男が立っていた。

ゴツイ体つきに、それぞれ武器を身に付けていた。

アビスソルジャーハンターだ。

アビスソルジャーハンターとはその名の通りアビスソルジャーを狩って賞金を稼いでいる強者達だ。

彼らは、もちろん奈落と契約しているわけでもないのだから、たいして複数人で襲撃する。

「だったらどうする？」

男が棍棒を振りかざし、襲いかかってくる。

1人目を軽々と避ける。

相手の懐に潜り込み、剣の柄を相手の腹部に食らわす。

もう一人の男も同様になぎ倒していく。

次の2人組も続いて襲いかかってきた。

俺は、勢いよく地面を蹴り、軽々とジャンプし、2人の男の横っ面に蹴りをお見舞いした。

ドサツと音を立てて男達が地面に倒れる。

しかし、俺が着地したと同時に背後から残りの1人が切りかかってきた。

(マズい…よ…避けられない。)

と諦めかけた瞬間、

「ズシヤ！」

男は背中から斬撃を受け倒れた。

「 たっ…助かった。 」

「 おい！大丈夫か？少年。 」

そこには、俺より少し年上で18ぐらいの青年が立っていた。

髪は少し暗い赤髪で、これまた黒地に赤色の兵士の服で、首に付いている首輪を見たところ彼もアビスソルジャーのようだ。

「 ありがとう。助かった。 」

「 おう。構わんよ。君もアビスソルジャーのようだ。俺と手を組まないか？ 」

青年は一息ついて続けた。

「 知つての通りこの砂漠は危険だ。仲間が居た方がいい。で、俺は仲間がいない…どうよ？ 」

「 ああ。組もう。 」

「 よし、話は早いな。俺はダイル＝テアード、あんたは？ 」

「 俺は記憶喪失なんだ。名前は無い…。 」

「 そうか、じゃアルキナってのはどうだ？ほらアシユラム伝説の。 」

「 何でもいい。 」

「じゃあルキナ、行くか！」

「ああ。」

こうして俺たちは手を組んだ。
砂埃が舞う中、2人の男が歩き出した。

第3話 暗闇の過去（前書き）

暗い話ですが…ダイルの過去に迫ります。

第3話 暗闇の過去

俺、ルキナ（相方命名）とダイル＝テアードは町を抜け、砂漠に出
ていた。

俺たちは、今この延々と続く砂漠の先にある聖都ニクスに向かって
いる。

説明すると、俺は契約をする際に記憶をなくした。

きっと消し去りたい過去があったのだろう。

だが皮肉な事に俺は今現在その記憶を取り戻すために手がかりを探
して聖都へと向かっている。

俺が今持っている物と言えば、綺麗な緑に輝く石。

可愛い笑顔の少女と2人で写った写真。

アビスソルジャーの契約の際に首輪と一緒に与えられた銀色のこの
剣だけ。

ダイルはある男を探しているらしい。

俺達はお互いの話をしていた。と言っても俺は記憶が無いのだから
ほとんど話す事が無いのだが……

ダイルは俺にアビスソルジャーになった理由を教えてくれた。

「俺はリアナって辺境の街に住んでたんだ。どこにでもある幸せな家族だった。あの日まで……」

気のせいか、ダイルが少し涙声になっていた。

「あの日、あの夜、星天の盗賊が俺達の街を襲った。」

星天の盗賊と言うのは、この国に居座る最悪の盗賊団だ。

奴らは、街単位を相手に襲撃する事もある。奴らが襲撃した後には何も残らない。何もかも。

「当然俺の家族も襲われた。両親は奴らに殺された。俺は瀕死の妹を背負って必死で逃げたんだ。でも妹は助からない……それは分かった。でも俺は諦められなかった。」

「その時、俺の目の前に奈落の門が現れたんだ。俺は……大切な街を守るためにアビスソルジャーになる事を誓ったんだ。」

俺は重い口を開いた。

「だ……代償は……？」

「代償は……」

ダイルの目から涙の粒が流れ落ちる。

「妹の命だ……。妹は助からなかったんだ……どんな事しても……そして妹が言ったんだ……『私の命を使って』って、俺は苦しんだんだ……」

何千回も、何万回も、俺は妹を殺してアビスソルジャーになった。」
ダイルがしゃがみ込む。

「俺は奴らと戦った。ただひたすら。でも間に合わなかった。街は全壊した。生き残りは俺だけだ。その街は後に悲劇の街として語り継がれる事になった。」

ダイルの重過ぎる現実…過去に俺は掛ける言葉を見失っていた。

時に言葉はあまりにも無力だ。軽い慰めの言葉、安い同情の言葉は虚しく響き渡るだけだ。

人は同じ痛みを同じ経験をしなない限り相手の痛みを理解出来ないだろう。

どんな同情の言葉も安い文句になってしまう。

だから人は軽々と言葉を使うべきでは無い。

ラブラブの恋人達は「愛している」と挨拶のように言う。

けれど、愛って言葉は、歪み裏返れば、束縛、暴力に走り、戦争に繋がる事もあるだろう。

だから、苦しみを分かち合い、相手の全てを無条件に受け入れられる、認めあえる、その時まで使うべきじゃない。

そう思うんだ。

俺はダイルに何も言葉を掛けることも出来ず、彼が口を開いた。

「だから、俺は奴らに復讐する。それが俺の目的だ。」

「そうか…。」

「さて、俺の話は終わりだ。さあ行くか！ここに留まれば蒸干し二匹の出来上がりだ。」

「そ…それは困る！非常に」

「だったら行くぞ。ほら！」

ダイルが立ち上げた。

真昼の砂漠は、太陽がジリジリと焼きつけていた。

地面にはサソリが一匹いた。

乾いた砂に2人の足跡だけが残されていた。

第3話 暗闇の過去（後書き）

自分自身、言葉の重みをもっと考えるべきだと思います。

第4話 サンドワーム

もうどれだけ砂漠を歩いただろうか？

体を伝う汗が止まらない。

既にTシャツは汗だくだった。腕をまくってタンクトップ状態なのだが、熱すぎる。

「水筒の水は大切だから、あんま飲み過ぎんなよ。」

というダイルも「ハアハア」と夏場の犬のようにバテバテだった。

俺は奴に話しかけた。

「おい、大丈夫かよ？あんた年なんじゃないのか？」

「おい、お前年って…俺とお前そんなに年変わらないっのー！」

「でも何か言動が老けてる。絶対。ジジ臭いよ。」

「てめえ…それは俺が一番気にしている事…！てめえ剣抜きやがれ
！」

とか何だとかじゃれ合っていると余計暑くなった。

「ハアハア」

「ハアハアてめえ暑いんだよ…。何で男同士でイチヤイチャしてん

だよ。しんどいつつーの。ああ年だわ。」

「やっぱり年なんだ…。」

「てめえそれ以上喋ったら煮干しのジヨニーにすんぞ！」

「じょ…ジヨニー？」

「じょ…Johnny」

「英語にすりゃ良いってもんじゃないっすよ。先輩。」

とか意味不明な会話をして、今に至る。

ひとつ問題がある。

魔物だ。

それも一匹じゃなくて、6ほどのハイエナのような魔物だ。

それに対し、俺達は2人。

有利とは言えない。

「どっするっ。」

俺達は今、岩陰に隠れているのだが見つかるのも時間の問題だろう。

「こつこつ時は先輩が先に斬り込むですよ。」

「何だよそれ？先輩が奢るんですよーとはワケが違っつーの！」

「じゃあどっするっ。」

「俺は左から出るからお前は右から出る。以上。解散。」

「もうちょい頭の回る人と手組めば良かった。」

「おい、聞こえてんぞ少年。」

俺とダイルが同時に剣を抜いて、お互いの剣の刀身を交差させる。

「カキン」と小さく音が鳴る。

「よし、行くぞ！」

走り出した。

と、同時に地面が大きく揺れた。

ハイエナ達がいる地面がいきなり砂地獄と化し、吸い込まれていった。

その大きな空洞から巨大なワームが現れた。

「なっ何だ!？」

「ヤバいぜ…ルキナこいつは砂漠で一番厄介なサンドワームだ!」

第5話 聖都ニクス

さて、どうしたものか？

目の前には巨大なサンドワーム…戦闘経験の少ない俺にとってはかなりの強敵だ。

ダイルの実力はまだ目にした事はないが…

俺は剣を両手で握り、サンドワームに突進する。
考えるより行動だ！

ダイルもそれに続く。
俺は人間離れた速さで奴の体を斬りつける。しかし、サンドワームの表皮は思った以上に固く刃が通らないのだ。

「くそっ」

ダイルが敵の前で立ち止まる、と魔法を唱えだした。ちなみに俺は全く魔法を使えない…。

「火の精よ。我に炎の力を与え賜え。火炎弾！」

大きな炎の塊がサンドワームを包む。サンドワームは呻きながら苦しむ。

その隙を狙ってダイルが剣で斬りつける。今度はかなり深く傷を負わせた。

まさか、ダイルってかなりの実力者なんじゃ…と感激してしまった。

今度はサンドワームが襲いかかってくる。

大きな口？を開き、俺を食らおうと追いかけてきた。

奴から逃げようと必死に走るのだが、追いかけてくるスピードが尋常じゃなく、こちらは砂に足を捕られ上手く走れずにいた。

マズい…このままじゃ食われちまう。

サンドワームとの距離が大分縮まってしまった。俺は諦められて敵に向かい合った。

「うおうー！」

剣を高く振りかざし、勢いよく地面に向かって振り下ろす。

その瞬間、荷物にしまっていたはずの緑の石が輝き出し、その光が剣にまとわりついた。

そして、振り下ろした剣からは緑色に輝く斬撃が繰り出された。

巨大なサンドワームは真つ二つになっていた。

「たっ倒した。」

いまいち自分が倒した事に実感も湧かず、驚いていた。

「お前、さっきの斬撃は何だったんだ！？石が光ってたぞ。」

ダイルも驚きを隠せずにいた。

「わ…分からない。でもこの石が助けてくれたんだと思う。」

「そうか、まあ倒せて良かった。」

俺たちは剣を収めて再び歩き出した。

太陽が西に沈もうとしている時、前方の景色は砂から緑の生い茂った草地に変わっていた。

「どうやら砂漠を抜けれたようだ。ここからもう少しすれば、聖都だ。今日はそこで泊まろう。」

ダイルが説明をする。

草を掻き分けながら進むと徐々に前方に街が見え始めた。

15分くらいすると、聖都の入り口へとたどり着いた。

やはり聖都と言うだけあって立派なものだ。街は1つの砦のように円形になっていて中央に向かって段々と壇状になっていた。

聖都なのだから勿論教会も何個があった。

この国では主に、アシラム教が信仰されている。

アシラム教とは、太古から伝わるこの世界が創世される頃に起こった戦争の伝説、アシラム伝説を創世記とする宗教だ。
現在の教祖は、この街のガレア？世だ。

俺達は聖都に入ると、すぐに宿屋に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0226ba/>

アビスソルジャー

2012年1月3日01時50分発行